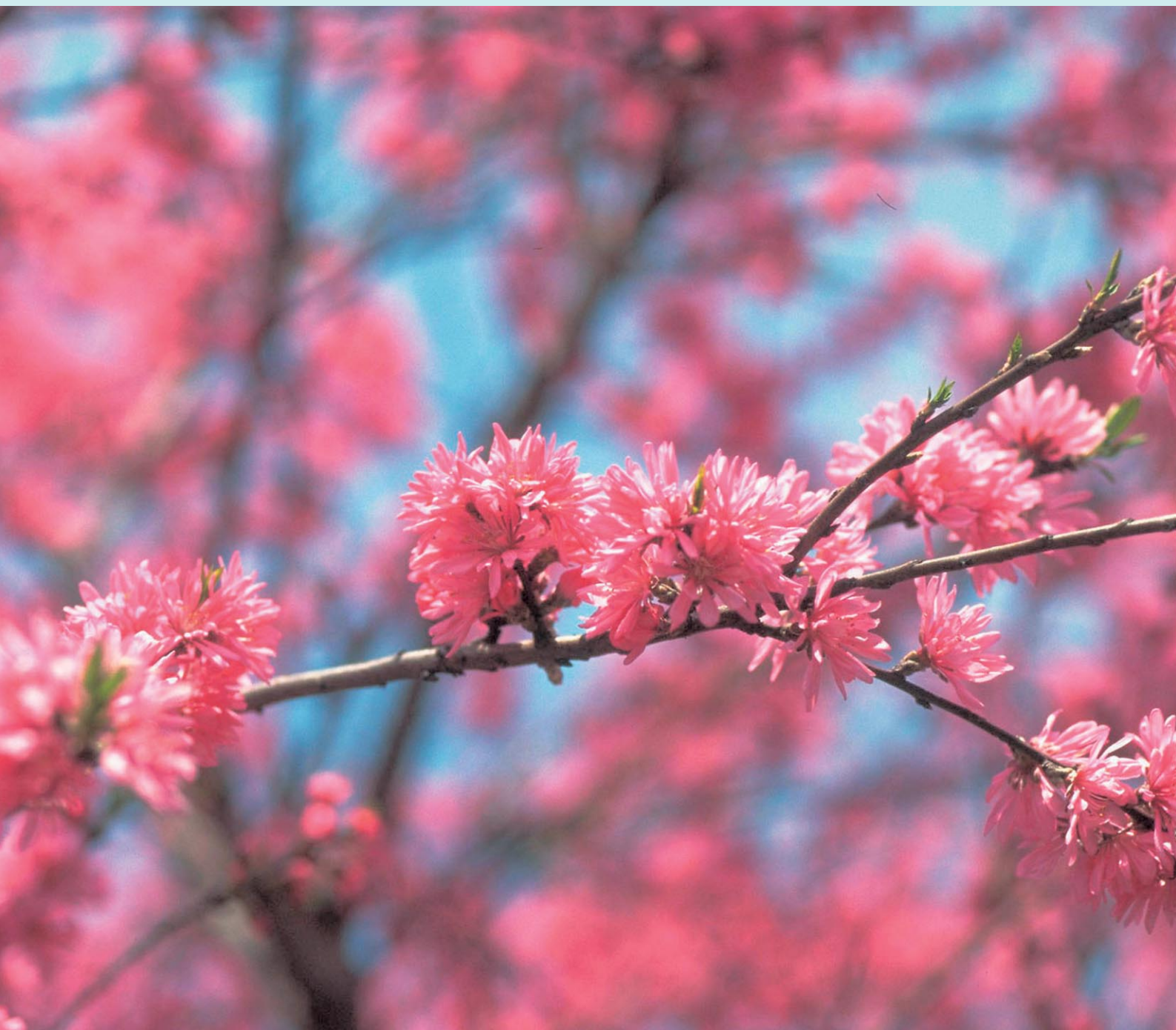


こころの言の葉

～第8集 届け、この思い～



平成22年度「こころの言の葉」コンクール作品集
鹿 児 島 市 教 育 委 員 会 編

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

今年も「こころの言の葉」第八集をみなさんの手元にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。

これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今年度は、過去最高の一万三千点を超える「こころの言の葉」が寄せられました。

この作品集には、中学生の子どもから親へ、親から中学生の子どもへあてた数十編のメッセージが掲載されています。面と向かっては、気恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。はがきに書かれたメッセージの行間からは、書き手の思いがあふれてきます。子どもから大人へさしかかる揺れ動くこの時期の中学生の気持ち、そんな子どもたちに戸惑いながらも正面から向き合い、包み込もうとする親の様子には、読む者の心を揺さぶられます。数多くの「言の葉」の中には、自分と同じ「こころ」のメッセージを見いだせるものがあるのではないかと思います。

皆さんで読んでいただき、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださったすべての皆さんに心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十二年十二月

目次

届けたい、こころの言の葉

子から親へ	4
かくれんぼ	4
いつかきつと	5
父へ、そして母へ	6
お願い	7
うるさい母	8
背比べ	9
お母さんの温かい手	10
「お父さん」と呼ぶから	11
キャッチボール	12
父のワイシャツ	13

伝え合いたい、こころの言の葉

親から子へ	15
娘へ	16
オムライス	16
かけがえのない君へ	17
ほががないね	18
反面教師	19
何が起きたの？	20
魔法の言葉	21
今のままで	22
中学生になつたあなたへ	23
大丈夫	24

子から親へ

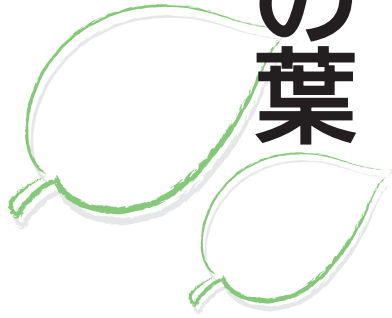
私は私	26
本当の自分	26
お母さんの言葉	28
何にもわかつてないくせに	28
わたしと父	30
おりこうさん	30
一緒にいたい	32
まだ、起きているのかな	32
夢の中だけでも	34
一人で育ててくれてありがとう	34
さよならも言わずに	36
母〓私	36
魔法のカレー	38
「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	39
審査員講評	40

親から子へ

助けてくれた仲間へ	27
お姉ちゃんだから	27
あなたのお母さんで	29
手紙	29
ヨシ！	31
買い物行こ。	31
いつしよに成長して	33
母のエネルギー	33
春の日のような	35
十四才の君へ	35
親父の講釈 愛情	37
希望の光	37
明日も明日もその先もずっと	38

届けたい、こころの言の葉

子から親へ



かくれんぼ

怒られたとき私は素直に謝っているって思ってますか。私は言葉では謝りますが心でどう思っているかはあなたには分からないと思います。

みんなの前では元気ですが、一人になったとき私が苦しんでいることをあなたは知らないと思います。私はあなたに秘密にしていること、たくさんあります。私のこと、分かっているつもりですか。

私は、一人で泣いています。あなたに見られてほしくないから。でも、いつも考えてるんです。私の弱い心に気付いて助けてくれないかな。私の弱い姿を見つけてくれないかなって。

私は、あなたとかくれんぼしているんです。私は、簡単な場所にかくれます。だから早く見つけてください。あなたの目に、私が映るまで。私は待っています。



いつかきつと

私の空は真っ黒だ。昔は、夏の空のようなきれいな青空だったかもしれない。でも今は、真っ黒だ。いつも、お母さんという暖かく優しい太陽が私を照らしてくれるのに、私は分厚い雲で隠してしまう。

お母さんがせっかく注意してくれたのに、頭の中では「うざい」と思ってしまう。

本当は「うざい」「じゃなくて」「ありがとう」「なのに」。

最近はいつも以上に照らしてくれることが多くなってきた。照らされれば照らされるほど黒い雨雲で照らしてくれる太陽を隠す。

でも、いつかきつと照らされたら照らされた分だけ青い空が広がっていくように、ちゃんと「ありがとう!!」って言える日が来ると思うんだ。

だから、お母さん、それまでこんな私だけど根気強く照らしてください。



父、そして母へ

私がおかしいことをすると母は、

「お父さんに似て。」

私がおかしい機嫌が悪いと父は、

「お母さんそっくり。」

何？親子なんだから、似て当たり前でしょ。それとも似ちゃいけない理由でもあるの？
口に出しそうになった言葉を、ぐっと押さえる。

何か伝えたいときは、いつも私たち子どもをはさんで何か言う。たまに父と母が「話し合い」を試してみれば、いつの間にか「けんか」になっている。

どこかでこんなのを見た。

「相手が悪いと思っているうちは、争いごとはなくならないものだ。」

父、母、二人がこれに気づくのはいつですか。

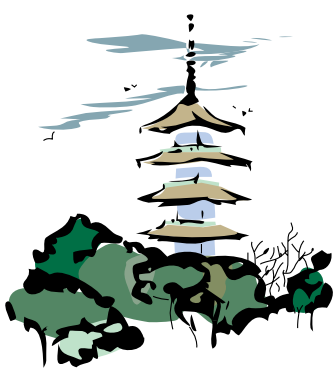


お願い

ぼくのお母さんはいつも家族のために家事をすべてしてくれれます。それに最近では、ぼくの塾のためなどといって、アルバイトをしています。なので、いつもありがとうといたくなるほどのよいお母さんです。でも、ひとつだけやめてほしいことがあります。それは、夜などにぼくが横になっているときに、

「けーん」

と言っているのっかってくることです。



ぼくのお母さんは、少しぼっちやりしているので、上に乗られると苦しいから、これだけは本当にやめてほしいです。でもこれはお母さんの安らぎのよつに思っていて、やめてとは言えません。これからもぼくは苦しくてもやめてと言えないでしょう。

いぬむい母

ぼくの母親はうるさい。家族だけでなく、ぼくの友達にも大きな声でおこる。部活の時もあれしなさい、これしなさいと絶叫するよ
うに言ってくる。そしてたまに友達から

「おまえの母親うるさい。」

と言われる。ぼくもそう思うのだけど、なんだかいやな気持ちになる。これでもぼくの母親なんだ。この母親でないとぼくはないと思ったのだろうか。

こんな母親だけど、優しいところもたくさんある。だから、これからはこの母親を他の人より少しきびしいだけだと思って、これからはいろいろがんばっていいことと思っ



背比べ

私の身長が母と同じくらいになり、最近よく、母と背比べをします。その時、母は必ず、ずるいことをして、あごを上げ、かかとをグラグラさせて一センチくらい持ち上げています。周りでみている父と兄は、「話にならん」と言って笑っています。結局どっちが高いか分からずじまいです。

そんな母は、食事の時必ず「これを食べると背が

伸びるよ」と言って、私にあれこれときらいな物も好きな物も食べさせようとします。

いつか、完全に私が母の背を追い越した時は、心の中でひそかに母に感謝しようと思
います。



お母さんの温かい手

ぼくのお母さんは、目が悪いです。目が悪くなったのは、兄を産んだ時でした。それからだんだん病状が悪化し、とうとう昨年からは、バイクなども乗れなくなってしまいました。明るすぎても、周りが真っ白、暗くなったら真っ黒、治療法も未だに見つからず、ぼくには手を引つ張ることしかできません。

「お母さん、段があるよ。」

「お母さん、そっちは危ないよ。」

こう言ってぼくは、お母さんの温かい手を引つ張ります。

お母さんはあきらめません。五感の内のひとつが使えなくなっても残りの四つを上手に使い、楽しく五人で暮らしています。ぼくの家は、お母さんの笑顔が絶えません。



「お父さん」と呼ぶから

お父さんに電話した。それは、お母さんにすすめられたから。もし、電話をしなかつたら逢うことはなかったかもしれない。

電話で話しているとき、ずっと一度も「お父さん」と呼べなかった。ぼくはすごく緊張していたのに、お父さんは次々と話してくる。ぼくは、お父さんに会いたかった。勇気を出して、

「今度会えませんか。」

と大声で言った。お父さんはうれしそうだった。

お父さんと会った日も、一度も「お父さん」と呼ぶ

ことができなかった。お父さんは、少し寂しい顔をした。

今度は、絶対「お父さん」と呼ぶから。



キャッチボール

両親に怒られた。悲しくなる。でも、怒られた後には、特別なことがある。それは父とのキャッチボール。それで悲しくなった心が一瞬にして消える。父とのキャッチボールが、僕を成長させてきた。まるで、心と心のキャッチボールのようなものが。

しかし、僕が五年生の時、父は天国への階段を静かに登っていった。悲しくなる。でも、僕の心の中に、一球のボールが飛んできた。それは、僕自身への

「次からは自分で頑張れ。心の中で応援するから。」
というメッセージのボールだった。

自分で解決することができるようになった。あのキャッチボールのおかげで。今でもまだまだ、心と心のキャッチボールは続いている。



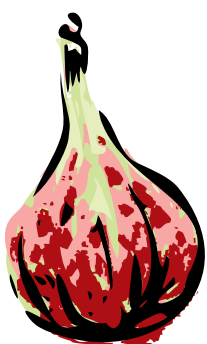
父のワイシャツ

ぼくの家では父が朝の準備をしてくれます。母は、仕事の都合で朝早く家を出るために、毎朝父はぼくと弟の朝の目覚まし、朝食の準備、カッターシャツのアイロンがけをしてくれます。

出かけるときは、

「生徒手帳、ハンカチ、ちり紙、持ったか。」

と必ず確認します。またかと思うときもありますが、ときどき忘れていることもあるので助かります。



今日もぼくは、父がアイロンでしわを伸ばしたしゃきつとしたワイシャツに身を包みます。父のワイシャツは、アイロンの残り熱とあいまって僕の心を温かくします。

「お父さん、いつもありがとう。」

届けたい、こころの言の葉

親から子へ



娘へ

いつからでしょうか。あなたと笑いあえなくなってしまうのは。

毎日、何を考えていますか。学校ではどんな風に過ごしているのでしょうか。話しかけてもだんまりで、それでもしつこく聞くと「うざい」「関係ない」と怒る。そんな態度にいつもけんかばかりで、お母さんは悲しいよ。もっといろんなことを話したいと思っているのに。うれしかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、一緒に分かち合いたいと思っているのに。でもごめんね。中学生になって一緒に過ごす時間は少なくなつて、今のお母さんにはわからないことばかりです。でもあなたががんばっていることだけはよくわかっているよ。

最近ようやく気づきました。あなたは鏡だということ。かっとなると何倍にもなつて返ってくるけど穏やかであれば、あなたも穏やかでいられることを。イライラするのは、お母さんがそうだからだね。二人で笑って過ごせるように、お母さんも変わるように努力するよ。



オムライス

「お母さん、夕べはごめんね。」

なぜ、その時言えないのかな？

最近あなたとぶつかると、ものすごい態度と不機嫌な言葉に反撃され、お母さんの心はノックアウトされてしまいます。テレビで誰かが、反抗期は「成長ホルモンのせい」と笑っていたけれど、笑えません。お母さんができた唯一の反撃は、翌日のオムライスのケチャップで「べー」と書くことでした。でも、「お母さん、夕べはごめんね。」が、あなたの本当の姿だとちゃんと知っているから、お母さんも「成長ホルモンのやつめ」といつて笑うように努力します。



かけがえのない君へ

中学に入学した頃の君は、いたずらっ子のようなくるくるとした瞳で、毎日を本当に楽しく過ごしていましたね。

一年たった今、黙って考え込むような表情をすることが多くなりました。気になって仕方なくて、君にあれこれ尋ねると

「うるさい」「お母さんには関係ないでしょ」「知らないよ、そんなこと」「こんな言葉が返ってくるようになりました。」

これが世に言う「思春期？」はたまた「反抗期？」
いつかこんな日がやってくる、と覚悟していたつもりでしたが、あまりにも突然にやってきたので、かなり戸惑いました。

そして、君が生まれてきてから今までのことを思い出し、もう思春期なんだ、この子は大人への入り口に立とうとしているんだ、と気づいたら、君が遠く離れていってしまうようで、とても寂しい気持ちになりました。

でもね、引き留めたりはしません。精一杯考えて、悩んで、君が信じる道を歩んでいってください。お母さんはいつでも君を応援しています。

君が疲れて立ち止まったとき、振り返ればそこにいる。そんなお母さんであり続けます。頑張り、かけがえのない君。



“ほ” がないね

「行ってきます。」

と家を出たら、必ず忘れ物を取りにもどってくる娘に、

「ほ”
がないね。」

と言いつつ

「うん、お母さんに似ているからね。」

と言いつつ

私が仕事でイライラしてグチを言うと黙って聞いてくれる。

「お母さんだけが辛いんじゃないよ。相手の立場に立って。」

と冷静に広い視野からアドバイスをしてくれる。

大人になったんだね。心優しく私を支えてくれてありがとう。あなたの笑顔が、私の宝物です。



反面教師

「もう、遅刻しないでよ！」と遅刻常習犯だった母が怒鳴る。

「いつまでテレビ見てるの！」とテレビっ子だった母が叫ぶ。

「まだ寝る時間じゃないよ。勉強しなさい！」と中学時代机で寝ていた母が怒る。

ある日、息子に聞かれた。

「中学時代、もっとやっておけばよかったことって何？」

「そりゃあ、勉強でしょ。」と母。

「だよな。部活ばかりやってたんだもんね。」と息子。

反面教師がここにいる……



何が起きたの？

去年の今頃は、「薄っぺらな人生の奴に何を言われても、

心に響かねえし！」と母に罵声を浴びせ悪態ついてた君。そして、今、中三になった君は、

「早く恩返しがしたいんだ。」

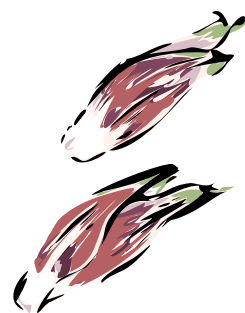
なんて殊勝な言葉、君の心で何が起きたの？母は思わず目を見はり、相好を崩す。

大人は、なかなか変わらないのに、君の体と態度はまた大きくなり、心のひだも多くなり、日々脱皮し変化する。

母はね、ずっと男に生まれたかったんだ、だって女は損だもの、背負うものが多すぎるって、そんな漠とした理不尽さを感じてた。

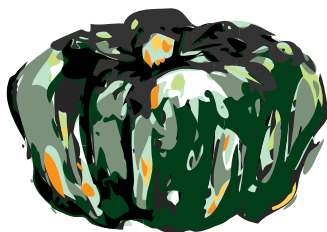
でも、君たちが産まれて来てくれて、そして、君たちの親になれて、心底よかったな
と
思っているよ。

反抗期もおしまいってこともないんだらうけど、どんな君だって、ずっと大好き
きわ。



魔法の言葉

二年前、おじいちゃんがアルツハイマー病になり、右も左も分からない介護にすっかり疲れ切って苦しんで毎日泣いている私に、あなたはそつと寄り添って「私を小さいころ育ててくれたみたいにやってみたら？」と言ってくれたよね。魔法の言葉を聞いた日から、気持ちが軽くなり、そうか……もう一度あの頃を思い出しながら接していけばいいんだ……。みるみるうちにおじいちゃんの顔も笑顔が多くなり、心が通い合うようになりました。あなたのお陰です。ありがとうございます。今、お母さんはあなたがピンチのときの魔法の言葉もお返しに考えています。お母さんもあなたに魔法をかけてあげられますように……。



今のままで

何も注文はないよ

今のまま育ってくれたら

高齢の父だけど

君が学校を卒業するまで

いや社会人になって家庭を持つまで

孫ができるまで、

長生きしたいなあ、迷惑をかけないから



中学生になったあなたへ

あなたが一生懸命がんばっていると、

「負けられないな。」

と、元気づけられる人って沢山いると思うよ。

幼稚園での参観日。ゴールで待つ私のもとに、ものすごい勢いでスタートダッシュしたあなた。両足に重たい補装具を付けて、勢いを維持できたのは、わずか二メートル。でも気持ちだけは最後まで、笑顔といっしょに持つてきましたね。

そんな負けん気の強いあなたも中学生。あの頃のきらきらした笑顔は、あまり見られないかな。身体に障害があると、思うように動けなくて、我慢したり、諦めたりしたりすることもあったらうな。

でも、出来ることだって沢山ある。あなたにしか出来ないこともあるはず。必ず見つけようよ。真剣な気持ちで。がんばるのは、あなたのビタミン剤。



大丈夫

「大丈夫って言葉が好き。」とあなたから聞いた。

勉強、友達、休み時間、行事、席替え、部活、給食……

人より少しゆっくり成長したあなたには、うまくいかないことが沢山あるんだよね。

小さい頃はよく泣いていた。

六年生の頃は、できなくて弱い自分を責めていた。

何度も何度もつまずいてその度に沢山の人に助けられていたね。

中三になり、辛いことも大変なこともたくさんあるのに急に落ち着いてきた。泣きたい

ことも、できなくて弱い自分もすべて受け入れて、心の中で「大丈夫。大丈夫。」と、自

分を励まして、頑張っていたんだね。

お母さんも、「大丈夫」って言葉が好きになったよ。

この夏、

「高校はわたしのペースでゆっくり勉強したい。」と自分で進路を決めた。

あなたなら、きっと上手くいくよ。大丈夫。



伝え合いたい、こころの言の葉

子から親へ、親から子へ



私は私

私とお母さんは毎日ケンカをしています。家の事や学校の事で。お母さんに宿題を教えてもらうと、「何でこうなるの。ちゃんと学校で聞いてないからでしょ。」という、きまり文句がきます。その時私は、「もう絶対教えてもらわない。」と心に誓います。そして、毎日必ず言う文句は、「長女なんだから。お母さんのころはね……。」と自分の事を話します。たまに、「お母さんの時代はね。でも、時代は変わったんだよ。」と私が言うと、十倍で返してきます。そして、私が一番嫌いなのは、妹と比べることです。「はできるよ。」と必ず比べます。「私は私。お母さんでも妹でもないんだよ。」といつか、堂々と言いたいです。そんな日が、来るまで私とお母さんの、ケンカは続きます。「お母さん、私、負けないから!!」

本当の自分

「ありがと……か。」たった一言がどうしても言えない自分がいた。その日は部活の大会が終わって、先生に集合したとき、「お父さん、お母さんたちにありがとうって感謝の気持ちしっかり伝えるんだよ。」と言われていた。中一のころからだんだんと妹に身長を抜かれ、そのことについていろいろ口を出す母や父にイライラしている自分がいて、視野に入るだけでもイライラした。面と向き合って話をしたのも小六以来……。だんだんと精神的に整理できなくなった。でも勇気を出して言ってみた。「ありが……と。」わたしのぎこちない言い方に母はビックリしてた。でも、母が抱きしめてくれた時、涙があふれた。

助けてくれた仲間に

「学校に行きたくない」何の前ぶれもなく言っただ一言。あなたが五年生の時でした。一日だけお休みをし、次の日からは保健室登校をすることに決めたことがあったね。保健室に着いて先生と話そうとした時、びっくりしたよね。あなたのまわりにたくさんクラスの友達が笑顔で現れたから……。待ってたよ」の言葉と一緒に教室に向かったあなたは、はるかに大きいあなたをおんぶし、その隣では、他の友達がランドセル。その隣では、荷物を持っていた。その姿を見て「この子のまわりには、大切な仲間がいる」と感じました。

「一つだけお願いがあります。もし、まわりに色々な思いで悩んでいる友達がいたら、自分に何ができるか考えてほしい。同じ思いをしたあなたにしかできないことがあると思うから。」

そして、あの日、助けてくれた仲間感謝する心を持ち続けてほしい。

最後に、

「親としては、何もしてあげられなくてごめんね」

お姉ちゃんだから

お母さんが、子供の頃、言われて嫌だった言葉

「お姉ちゃんだから」

自分の子供には、言わないようにしようと思っていた言葉

「お姉ちゃんだから」

やっぱりあなたに言ってしまう言葉

「お姉ちゃんだから」

あなたがお姉ちゃんだから

お母さんはとっても助かっています

いつもいつもありがとう

お母さんの言葉

「何でそんなに泣き虫なの。そんなんだつたら部活に入ってた方がよかったのにな。」

ケンカで心がズタズタにされ、涙が出て来た時の御決りの言葉。だれが聞いたつてよくが正しい時もある。でもお母さんの言葉におしつぶされる。弱虫、泣き虫、いじけ虫。気付けば三びきそろっていたばくに、もはや言い返す力は無くなっていた。

でも夏休みになって気付いた。昼にそうじ機の音が毎日ひびいている事に。干してあった洗たく物が、気付かぬうちに取り込まれている事に。何時間も台所の前に立っている事に。だれにも感謝されずに自分の時間を削って、家族のためにがんばってくれてる事に。心はズタズタになっても直る。でも、過ぎた時間は絶対にもどってこない。お母さん。ありがとう。

何にも分かってないくせに

「うるさい、黙っててよ。」って、よく思ったりする。「オシャレしたいのも分かるけど」？「遊びに行きたいのも分かるけど」？ 黙れ黙れ！ 何にも分かってないくせに。ウソ。お母さんだつて今の私と同じ学生時代があつたんだ。「分かってないくせに。」なんて心の底では思つてない。分かつてる、そんなこと。分かつてるけど…。頭の中がパンパンで考える事が多すぎると、そんなことまで頭が回らなくなつて、つい、イラツときたりしてしまう。後からじつくり、一人で考えてみてから、やっと気づくんだ。でも、それじゃ遅いよ。最初っから素直になるにはどうすればいいんだろう。今はまだ分からないけど、いつかきつと分かるような気がする。お母さん、ちゃんと私、言ってくれた意味分かつてるからね。ありがとう。

あなたのお母さんで

あなたが、幸福そうに笑っていると、

お母さんは、あなたに負けないぐらい

幸福になる。

あなたが、苦しそうに悩んでいると、

お母さんは、いっぱいいっぱい考えて

あなたを元氣付けたいと思う。

あなたのお母さんにしてくれて

ありがとう！

手紙

初めてあなたから手紙をもらったのは、
あなたが4才の頃だったかな。

「ママ、いつもありがとう。だいすき。」
と書いてあり、我が子からの「ありがとう。」
の一言にジーンとしたのを、今でもよく
覚えています。あなたは私によく手紙を
くれるよね。

いつの頃からか、私の誕生日や母の日
にくれるあなたからの手紙が、私の宝物
になりました。

「ママ、笑顔を絶やさないで!!」

「うちもママを笑顔にさせられるよう、
頑張るから!!」

これには「ドキッ!」私、そんなに暗
いかな? 頑張らないといけないのは私だね!
これからもあなたの手紙を待っています。

わたしと父

わたしは成績が悪いわけではなく、格段に優れているわけでもない。「塾に行け。」この三年間に何度も父に言われた言葉にわたしは「俺は塾に行かない。」といつもきっぱりと答えた。わたしは教えられる学習より、自ら学ぶ学習を大切にする信念を貫いてきた。その方がしっかり覚えられるし、やりがいがある。しかし、テストにあまり進歩はない。そんなわたしに父は、「お前の人生だ。やりたいようにしろ。」と温かい目で見守ってくれる。わたしはそこに父の優しさを感じた。いつもは恐い父だが、「お前が生きていることが、お父さんにとって一番の財産だ。」と言ってくれる。心優しい父でもある。わたしの父は、わたしにとってかけがえのない存在であり、世界で一番の父だ。

おりこうさん

「いっぱい泣いて、いいんだよ。」私は、母にとって「おりこうさん」でいたかった。だから、わがママを言いたいときもあつたけど、がまんした。遊びに行きたくても、家で勉強したり、母の手伝いをしたりしていた。でも、その度に「自分」がこわれていくような気がして、少し怖くなつた。でも母は、ほかの兄弟のことで大変だったから、自分だけでもおりこうでいたくて、その気持ちをかき消していた。でも、もう限界だった。母のおりこうさんでいることに疲れた。そんな私に、母は気づいていた。「、もういいんだよ。いっぱいわがママ言つて、泣いていいんだよ。お母さんのために、がんばらせてごめんね。今までよくがんばつたね。」そう言ってくれた。私は、母の胸の中で、いっぱい泣いた。その母の優しさに、私は今も助けられ続けている。

ヨシ!

一日の始まり。朝食を家族そろっていただく。あたり前の光景ですが、毎朝様子が違う。それでもご飯を食べて送り出せたとき、毎朝、「ヨシ!」と一人でガッツポーズが出る。

乾いた洗濯物の匂いをかぎながら、「うん! きれい!」と思えたときまた「ヨシ!」と嬉しくなってくる。

家族四人の小さな我が家。家の中で四人の個性がぶつかり合い、泣いたり、怒ったりドタバタの日々ですが、みんな「楽しい我が家」と思ってくれているに違いない。そう思っただけでまた明日も頑張れる。

買い物行こ。

変なかんじ
「あれ? 何だか大きくなってない?」
冷蔵庫に麦茶を取りに来た息子と、ふと並んで立った時、今までと目線がかなり違う事に気づく。

この前までは、毎朝部活の朝練でバタバタしながら、家族一番に家を出て行ってたね。夕方遅く帰って来ると、夕食、風呂、宿題……。並んで立つ事もなかなかなかったね。

兄弟の中で一番「今日ね……」と様子を話してくれる。その声のトーンで調子に分かる。分かりやすい分、トーンが低いと私まで気分が暗くなる。いっしょに分かち合いたいけれど、そこまでは求めてないのかな。

「お母さん、買い物行こ。」
自分の欲しい物があると誘ってくる。「何も買わないよ。」と言いながらも財布を手にする私です。

一緒にいたい

いつも仕事が大変なのに、わたしたちのために休みをとって、いろいろな所に連れていってくれて、ありがとう。仕事をぬけて、試合を観にきてくれて、ありがとう。本当に感謝しています。

でも本当は、毎日家族一緒にご飯を食べたいし、一日の出来事をお父さんにも聞いてほしい。テレビも一緒に見て笑いたいし、たまには、私たちの帰りを待っていてほしい。「帰ってくるけど、おそいから寝てていいよ。」

そう電話で言われても、本当はずっと起きて待っていたいし、

「今日は帰って来れない。」

と言われても(どうして帰って来てくれないの)って思ってる。お父さん、こんな私は、わがままかな。

いつか、私が願う毎日が訪れますように。

まだ、起きているのかな

夜の十二時。あくびをしながら、勉強机を離れ、リビングをこっそりのぞく。「やっぱり、今日もか」と私は思う。そこには、ソファで眠気をこらえながらテレビを見ている両親の姿があった。中学生になり、就寝時間の日付が変わることが多くなった。それにも関わらず、毎日、私が勉強を終えるまで、こうやって起きているのだ。両親の起床は私より早い。だからこそ、早く寝るべきなのに、そう思っ、「先に寝てよ」と言っても目をこすりながら

「自分だけ寝てるのはなんかねえ……。」

と言う両親。その言葉は、私にとってなんだか嬉しく感じた。両親のあたたかい優しさをもらった気がして。リビングから聞こえてくる声に、安心して自分がある。だから、今日も見えます。

「まだ、起きているのかな。」

いっしょに成長して

まだ、お母さん（親という立場）になって三年目だから、子供同士のケンカみたいないない事ばかりしてるけど、うまくしかれなくてごめんね。

今まで、誰かをしかる事がなかったから、言葉も出てこないんだ。許してね。一緒に成長していこうね。

それから、妹が生まれてから、あなたがいてくれて、本当に助かってるんだよ。これからもよろしくね。ありがとう。何回ケンカしても大好きだよ。

母のエネルギー

君がまだ小学生の頃、お母さんは毎日「これでいいのかな、間違った子育てをしてないかな」と不安になっていた時、家族五人で足湯に足を入れながら、君の一言「あゝあ、こんな気持ちいいの、おばあちゃんも連れてきてあげれば良かったね」

この言葉がどんなにお母さんの心を救ってくれたか。子育てに失敗も成功もないよね。

ちゃんと君たちは見てくれている。そして感じてくれている。成長している。心も身体も、その分だけ、お母さんもエネルギーをもらって元気になれます。

優しい子に育ってくれてありがとうございます。感謝しています。

夢の中だけでも

お母さんと話している自分……。

「夢か……」朝起きたら、もしかしたらお母さんがいるかもしれないって変な期待しちゃうんだ。でも、もうお母さんはいないんだよね。せめて夢の中だけでいいから毎日会えないかな。昔からわがままな私だけど、この願いだけ聞いてもらえないかな。

私頑張ってるよ。お母さんがいない間に、いろんな経験して成長したもん。たくさん話したいことありすぎて言いきれないや。また私のおしゃべりでお母さんを困らせた昔みたいにいっぱい話したいな。

直接会えるのはもつと先になると思うけど、それまで待っててね。いつもそばにいてくれたお母さんはこれからもずっと世界一のお母さんだよ。見守っててね。そしてたまには夢の中で話そうね。

一人で育ててくれてありがとう

仕事しているお母さんの顔とってもかっこよかった。いつものお母さんの顔とはちがってちゃんと仕事の顔になっていたよ。

お母さんは、今まで一人で私と妹を育ててきて、とても大変だったんだよね。悲しかったね。つらかったね。でも、今まで私と妹を育ててきてくれたぶん、私達がお母さんを支えるから、いつまでも元気で怒りっぱくて、いままで通りの私達のお母さんでいてね。

私達は、仕事をがんばっているお母さんも、私達を怒っているお母さんも、家のそうじをしているお母さんも、勉強しているお母さんも、全部大好きだよ。

また、仕事しているお母さん見にくるね。今まで、一人で育ててきてくれてありがとう。

春の日のような

食事の支度をしていると、背後に人の気配。

はっとして振り返ると、「今日のおかずは何？」と覗き込むあなたの顔。

大好物だった時は「やったー。」と笑顔になるけれど、

苦手な物だった時は「えー。」と渋い顔。

でも、その後、さりげなく手伝ってくれるよね。

一緒に買い物に行った時も、重たい方の荷物を本当にさりげなく持ってくれるよね。そのさりげなさ、すごくかっこいいと思うよ。きっと、あなたの心の中には、思いやりの気持ちがあるんじゃないかな。その、あなたの思いやりに触れた時は、私の心まで温かくなるよ。

いつまでも、あなたが生まれた春の日によ
うな、温かくて優しい心を持った女の子で
いてね。

十四才の君へ

言わないと、帰ってから夜まで制服。

言わないと、マンガやゲーム手放さず。

言わないと、連絡物も明日の準備もしない。

言わないと、宿題全く始まらない。

毎日毎日、言いたくないのに口うるさく言っちゃいます。最近はずっくり話をしませんね。

最近の君は、年頃のせいかとあきらめつつ、少し淋しさを感じます。君は今、反抗期でしょうか。でも、うたた寝した私にタオルケットを掛けてくれるやさしい君、しばらくは、ガマンかな。

ときどき、五才のころの君がなつかしい。

さよならも言わずに

お母さんは料理が上手かった。しつかりと皆の健康を考えて美味しくつくってくれた。それもそうだろう。お母さんは小学校で給食をつくっていたのだから。僕もめつたに病気にかかる事はなかった。お母さんは怖かった。怒るとお父さん以上に怖かったかもしれない。でも、知っているそれは僕の事を思っただけで叱っている事を。だって最後は必ず謝ってくれたから。

お母さんは応援してくれた。僕が漫画家になると言った時、お母さんは優しく応援してくれた。

でも、お母さんは逝ってしまった。さよならも言わずに、突然この世から逝ってしまった。僕は、泣いた。たくさん泣いた。涙が枯れるまで泣いた。色々話したかった。謝りたかった。遊びたかった。でももう戻って来ない。だから僕は決めた。お母さんの分まで、この命尽きるまで歩き続けよう。

母 = 私。

私の母は美人だ。決して若いとは言えないが、とてもキレイな顔をしている。私はそんな母が大好きだ。でも、私は母に似ていない。母のすっきりした鼻も、細いあごもキリツとした目も全部似ていない。性格もちがう。運動神経も真逆。母はカンペキなのに私は欠けている。「私って本当に母の子なのかな？」と小さい頃、思った事があった。すごく悩んだけど、ある日母を見ていたら、気づいた。母は時々かみをイジる。私もイジる。母は犬が好き。私も好き。よく母を観察するとたくさん似ている所があった。同時に母が苦手な私が得意な事も見つけた。母はカンペキではない。私もカンペキではない。こういうところも一緒じゃん。母 = 私。私 = 母。誰が何と言おうと、私は母に似ている。

親父の講釈 愛情

おやじに愛は語れない
君がパパと呼んでくれていた頃 君を見守る
ただで
わたしは何をしてやっただか思い出せない
でも君がしたことはいろいろ思い出せる
感性をたのもしく思い 可能性を感じ
ひとりの人間として見ていた
今の君にも私は何もしてやれない
ただ一緒にいてやれるだけだ
君の成長する場に立ち会えて
私も多くを気づき 考え 学んだ
実は今の君といられる 私は 楽しくてしよ
うがない
感性が磨かれ可能性が開花し
君がまだ見ぬ誰かと出会えたとき
言葉にならない 今 楽しくてしようがない
私の気持ちかわかるだろう
これからも いろんなことで 感性を試され
るだろう
事実は言葉で伝えることができるが
心は言葉で伝わりにくい
君も心に響いたとき
楽しくてしようがないと笑って言えるだろう
楽しくてしようがないと笑って言える私を見
ていてほしい
それを伝えるのがおやじの仕事

希望の光

”
ゆっくりでいいんだよ
“
流れる時間の中で
きつと”希望の光“ がどこかで輝いている。
それは君が悩み、苦しんで
泣いた分だけ近づいているんだ。
一つ一つ乗り越えられる強い心
即ち大きな”宝“ になるんだ。

魔法のカレー

日曜日の朝は、嫌な予感がする。起きたばかりのわたしを待っているのは、ここに顔のお父さん、そしてできたばかりのカレー。ほとんどが切っていない皮つきのにんじん。火の通っていないガチガチのじゃがいも。かくし味にいろんなものが入った、ルーの味。お父さんのカレーは、あまりおいしくない。「また、作ったの?」そう言いながらわたしは、仕方なくカレーを食べているね。でもね、お父さん。お父さんのカレーはわたしを笑顔にしてくれる。全然おいしくないけれど、お父さんにしか作れない味だから。おいしく食べてほしい、と気持ち伝わってくるから。やっぱり、ありがとう。

明日も明後日もその先もずっと

「ねえっ、おかあさん」話しかける時に必ず言う言葉。密かに、お母さんの大好きな言葉だっただけあなたは知ってるかな。大きくなっただけ。八年前……、大きな、ぴかぴかのランドセルを背負って学校へ行く、小さな、小さなあなたの姿が、かわいくて、かわいくて。そして心配で。それから毎朝、見えなくなるまで、あなたを見送ることが、お母さんの日課になりました。必ずちよこつと振り向いてバイバイ。大きな「バイバイ」がだんだん小さな「バイバイ」になってきて……、少しずつ、少しずつ体も大きくなり、背中のランドセルが小さく見えるようになってきて。もうそろそろお母さんの日課もおしまいのかな……と思っていた。けれど、中学生になり、真新しい制服を着て少し不安そうに学校へ行くあなた。やっぱり振り向いて「バイバイ」。「がんばれ。」それから三年……。楽しそうにパタパタと走っていく後ろ姿に、ホッとすることとで始まるお母さんの毎日。明日も明日もその先もずっと、お母さんの日課。ねえっ、ちゃん

平成22年度「こころの言の葉」コンクール 入賞者一覧

大 賞

中学生の部	親 の 部
落 合 祐美子	神 川 葉 子

準大賞

中学生の部	親 の 部
鶴 田 眞 澄	松 下 和可子
中 山 賢 人	水之浦 眞 理

優秀賞

中学生の部	親 の 部
副 島 直 大	上 野 智 子
吉 田 朱 里	平 山 由 美
山 元 莉 帆	廣 濱 俊 継
福 山 匠	末 吉 慶 子
上 栗 孝 輔	山 口 直 子
永 野 雅 也	國 見 純 子
村 山 七 美	徳 丸 なりえ

入 選

中学生の部	親 の 部
南 祐 希	池 田 卓 子
松 下 琴 美	西 岡 美由紀
牧野田 悠 芽	谷 川 美恵子
廿 枝 七奈子	品 川 里 香
黒 木 咲 花	松 永 夕里子
宮 田 康 平	山 口 知 子
上 園 舞 華	田 中 智 子
杉之尾 信 吾	山之内 由美子
田 畑 憂 佳	宇 田 敏 郎
町 まりん	福 留 琴 美
新 原 旺 志	毛 利 みどり
木 田 夕 菜	二 石 栄 子
川 津 りら	桑 木 弘 美

応募総数:13,687点

審査員講評

審査委員長

千々岩弘一先生

八回目を迎えた本コンクールには、過去最高の一三、六八七点の応募があった。応募してくださった中学生と保護者及び御支援いただいた関係各位に心から感謝申し上げたい。お陰様で、本コンクールは「鹿児島市民の財産」とも言うべきものに成長してきている。

本コンクールの第一義的な役割は、当事者同士の心の浄化（カタルシス）にある。葉書一枚大のスペースに「真心の言葉」を綴ろうとするとき、中学生も保護者も互いの存在を強く意識し、その存在の意味を自分に問いかけ相手を思いやるにちがいない。そんな「優しい時間」の流れる機会を持つことが、本コンクールの最も重要な役割である。一方で、本コンクールの作品集に接する鹿児島市民は、綴られた親子の姿に自分を重ね自分の来し方を振り返る。ここにも市民としての心の浄化の機会が生まれている。同時に、作品集を通して、今の親子の実情を知り地域の宝である子どもやその子育てに奮闘する保護者を見守っていかうとする思いを共有しあうことができる。本コンクールが「鹿児島市民の財産」とも言うべきものに育った契機がここにある。大賞や準大賞をはじめ入賞作品は、当事者の「真心の言葉」に感銘を受けたと同時に、「鹿児島市民の財産」として多くの市民に共有していただきたいと感じた作品であった。

鹿児島国際大学教授

坂尾加代子先生

思春期の子どもたちの「今一番伝えたい思い」が言の葉となって、今年もたくさん寄せられてきました。子どもたちの言の葉の中には、迷い、悲しみ、苛立ちなど様々な思いを抱きながらも、懸命に自分の力で自分を育てていこうとしている姿に成長を感じさせられたものが多く印象的でした。様々な思いがぎっしり詰まった親の言の葉からは、「どんなときも子どもを信じて見守っていく」という強い思いが伝わってきて、「自分を育てていく力」は、親のこうした思いのもとで育まれていくのだという感じました。

審査に携わってきて、いつも感じていたことは、子どもたちには「それぞれ、」その子なりの育ち方があり、その子なりの価値観がある」ということです。しかしながら、このことを大切にして導き育てるということは容易ではないと思います。親と子がぶつかりあうとき、特に物事を選択しなければならぬとき、どこまで子どもの気持ち尊重すべきなのか……、この見極めこそが親業の難しさであり、大切な場面であると思います。このようなときに親と子が少しでも納得できる答えを見つかるためにはお互いのコミュニケーションが欠かせません。「こころの言の葉」をきっかけに、そうした場をできるだけ多く持ち、親と子が共に「悔いることのない今」を生きていってほしいと切に願っています。

市「さつまっ子」育成市民会議副委員長

岩松マミ先生

今年、全国で所在不明のお年寄りが社会問題となった。地域から、そして家族からも切り離されたお年寄りの孤独の深さを思うと同時に、私たちが確かなものと信じている家族のきずなは、実はもろいことを教えているように感じる。

そんな状況だからこそ、親子の心の声をつづる「言の葉」にほっとした。「すなおになれない自分が好きじゃない」「お母さんが笑いながら話を聞いてくれる時がうれしい」「子ども扱いしないで」と頼って」と子どもがボールを投げると、「反抗期っていつ終わるの」「口うるさくて反省しています」「あなたが私のエネルギーの源」と親も返す。

ほほえみ、時にちよっと涙ぐみながら読み進めるうちに、家族のきずなはいきなり切れるのではなく、少しずつ小さな積み重ねで失われていくのかもしれないという思いが頭をよぎった。「ありがとう」「ごめんね」とぬくもりのある言葉が家族で交わされる限りは大丈夫と実感した。

今回親の応募が多かった。反抗期の子どもに四苦八苦しながらも情愛に満ちた文章に共感させられた。そして今年も子どもたちの感性の豊かさ、観察力の鋭さには脱帽した。でも、子どもたち、もっと叫んで怒っていいよ。この矛盾に満ちた世の中と折り合いをつけるのはそれほど苦しい作業なのだから。

南日本新聞社編集委員

山元一八先生

八年目を迎えた本コンクールに、一万三千点を超える中学生の作品、四百点を超える保護者の作品が寄せられ、年々応募数が増加しつつあることは大変喜ばしいことである。改めて市当局の御尽力と各学校における御理解と取組、生徒諸君の努力に対し、心からの敬意を表したい。

寡黙な思春期故に、自己の内面を表出しながらない子どもたちの胸の内が、短い文章の行間に滲み出ていて、涙を禁じ得なかった。ある生徒は「頭の中では『うざい!』と思ってしまう。本当は『うざい』じゃなく、『ありがとう』なのに……」と書いていた。これは、多くの子どもたちの声を代表した「つぶやき」であるように思う。また、自己確立の真っ只中にある彼らの時として心の底からの絶叫もあった。親や大人や教師は心を澄まして、こうしたつぶやきや絶叫に気づくべきであらう。

連続殺人という凶悪事件を引き起こした少年の裁判を最初から最後まで膨張し続けた作家の佐木隆三氏は「私が傍聴し続けて到達した結論は単純なことである。…親子の信頼関係・家族の融和こそが大事であると実感した。」と述べている。

青少年の人間性形成に最も大きな影響を与える「家族と信頼と融和」「気づきと思いやり」が深まり、広がるために、本誌が各場で十分に活用されることを期待したい。

元公民館長

遠矢仁司先生

社会が便利で暮らしやすくなる反面、子どもたちを取り巻く人間環境破壊が深刻になっています。このコンクールは、親と子の対話が少なくなってきたと言われる現代において、心では思っているも照れくさかったり、遠慮してしまったりして、どうしても口頭で伝えられないことを、こころの言の葉としてメッセージを贈り、お互いの存在について考えてもらえるように始まったものです。回を重ねるごとに応募作品が増えていき、今回も、一万三千点を数えました。大変嬉しく思います。

寄せられたたくさん作品のどれもこれも、が、私自身の体験そのもののように思えて、胸を熱くさせられながら読ませていただきました。時代が変わっていても、忘れてはいけない「子を思う親の心構え」や「親を慕う子の思い」は、希薄化することなくしっかりと続いていることが、はっきりと分かりました。親である私たちは、これから子どもと本気で関わるのが大切だと思います。そうすれば、子どもに必ず伝わるはずですよ。

思春期にある中学生の皆さん、くじけそうになっても、自分を信じ、そして親を強く信じて進んでください。きつといつか、心に春の風を運んできてくれるはずですよ。子どもたちみんなに、本当の笑顔があふれることを願っています。

市PTA連合会会長

こころの言の葉

～第8集 届け、この思い～

平成22年12月20日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099) 227-1941 FAX (099) 227-1923

